

今も続く土器づくりの伝統

近世以降もかつての有爾郷地域では、「焙烙」やイワまたはユワ（沈子）と呼ばれる漁網用のおもりが作られていました。『明和町史』によれば、焙烙は本郷地区で昭和初期まで三軒ほどで作られ、イワ・ユワ（沈子）は養村で昭和30年代まで作られていたそうです。

古代から続けられた伊勢神宮への土器の奉納は、明治維新以降は養村の二軒だけとなりながらも守り伝えられてきましたが、現在は町民が土器を製作することはなくなりました。しかし神宮司庁が昭和12年に設置した養村の「神宮土器調製所」で今も土器が製作され、明和町と伊勢神宮との深い関わりが続いています。



成形中の神宮土器



乾燥中の神宮土器



土器を作る道具類

昭和8年（1933）頃の神宮土器製作の様子



乾燥中の神宮土器



土器を焼く窯



<解説シートに出てくる遺跡の位置図>

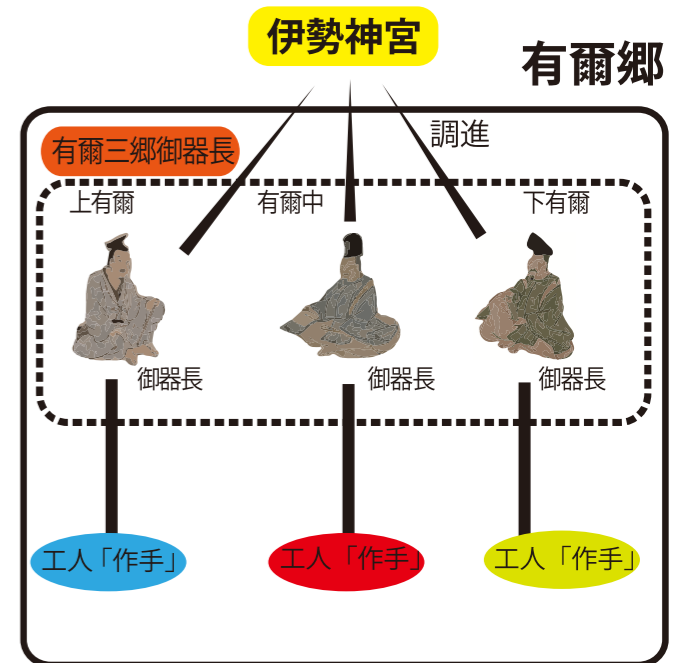
中世への転換 御器長の登場

伊勢神宮や齋宮寮への土器を作っていた有爾郷ですが、中世になると土器を作る工人を従えた「御器長」を中心とした体制になります。

文献史料から中世の有爾郷は三つに分かれていたようで、それぞれに御器長がいたと考えられます。「下有爾」や「有爾中」といった地名はこの名残といえるでしょう。

御器長は、伊勢神宮に定められた量の土器を調進するだけでなく、山田（現在の伊勢市外宮周辺）におかれた「御器座」を介して、土器を商品として販売していたようです。

明和町南部で大量に作られた土師器焼成坑ですが、平安時代末以降の土器を焼く明確な遺構はあまりみつからないため、古代に比べると中世の土器生産の様子はまだまだ不明な点が多いです。しかし、町内で行われてきた発掘調査からは、土器生産に関わる資料がいくつか見つかっています。これらの成果を基に、明和町における中世以降の土器生産について探ってみましょう。



山田、御器座

中世の生産体制と土器の動き（イメージ図）

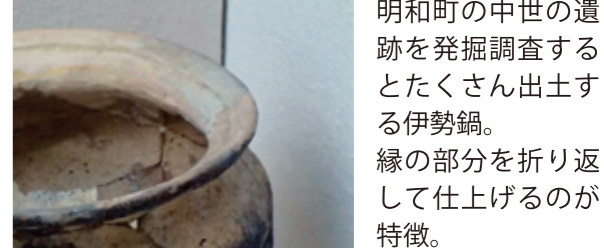
伊勢のブランド品「伊勢鍋」

三重県内の中世の遺跡を発掘調査すると、雲出川以南を中心に、共通した特徴を持つ土師器の鍋や皿などが、大量に出土します。中でも日常の煮炊きに使用されていた鍋は、研究者に注目され「伊勢型鍋」あるいは「南伊勢系鍋」（以下、伊勢鍋）と呼ばれ研究されてきました。

伊勢鍋は伊勢湾沿岸にも分布し、遠く関東地方の遺跡でも見つかります。分布する地域と伊勢神宮の神領の広がり重なるため、広い範囲で使用された背景には伊勢神宮との関係も考えられます。

伊勢鍋の出土量が南伊勢地域で最も多く、有爾郷が古代から土器生産を盛んに行ってきた歴史性から、伊勢鍋も有爾郷を中心に生産されていたと考えられます。

こうした状況は、有爾郷の土器生産が古代からの伊勢神宮への調進を継続する一方で、生産された土器を商品として経済的に流通させるようになった中世段階における有爾郷の変化を示しています。



明和町の中世の遺跡を発掘調査するとたくさん出土する伊勢鍋。縁の部分を折り返して仕上げるのが特徴。

ほんごういせき
本郷遺跡 明星字後山

本郷集落の北側に広がる本郷遺跡は、標高 12m前後で、玉城丘陵から北東方向へのびる舌状の低丘陵先端部に位置しています。圃場整備事業に伴い、三重県埋蔵文化財センターが平成元年と平成 3 年に発掘調査を行いました。調査では、平安時代後期（11 世紀前半頃）とみられる土器を焼成する遺構（長辺約 1.1m、短辺約 0.8mの略方形）が見つかっています。



さらに注目すべきは、16 世紀代を中心とした館跡が見つかっています。館跡にはいくつかの区画があり、最も主要な区画は幅 4～5m、深さ 0.8～1mの堀に囲まれ、東西・南北ともに約 50mの方形状のプランを呈します。

この館跡は、かつて下有爾と呼ばれた地域を治め、伊勢神宮へ土器を調進した「御器長」の居館と考えられます。館跡が所在した「本郷」とは、「下有爾郷」の本拠地という意味があったと思われます。現在、圃場整備によってかつての旧観はなくなりましたが、館跡の痕跡は地籍図や古い航空写真からも確認することができます。

地籍図に見える館の痕跡
方形状の区画 1 部分の地割り（黄色破線部）が確認できる。



昭和 23 年航空写真（国土地理院提供）
本郷集落の北側に広がる畑の中に、館跡（区画 1）に相当する部分が確認できる。
圃場整備前までは土壘状の痕跡も見られたという。



とつかいせき みのむら とつか
鳥墓遺跡 養村字鳥墓周辺

遺跡は標高約 20mの独立した丘陵上にあり、鳥墓神所推定地が近くにあります。商業店舗の新築に伴い平成 24 年に発掘調査を行いました。

調査では長方形の大きな土坑が見つかりました。穴の底一面に焼けた炭の破片があり、出土した土器から 15～16 世紀頃の土器窯と考えられます。規模は、長辺約 3.1m、短辺約 2.4mの略方形をし、古代の二等辺三角形をした土師器焼成坑とは形態が異なります。その他、土器を作る粘土を溜めておいた土坑も見つかっています。調査の成果から、今までわかっていなかった当該期の土器生産の一端が分かってきました。



粘土を溜めていた土坑



断面をみると、白色の粘土が底まで（約 0.4mの深さ）入っている。



見つかった土器窯

地元に残るひささ池の伝承

ひささ池は、本郷集落の西方にあり、旧永池川の対岸には地元で「三本榎」と呼ばれている有貳神社跡があります。地元の古老の言い伝えでは、池の中に甕があり、その中に白いうなぎが棲んでいるとされていました。また、土器を作るときは、池の水を汲んで土器を作らないと土器が壊れてしまうと言われていたようで、土器生産に必要な神聖な水であったようです。

ひささ池では戦前まで日照りになると、雨乞いの行事を行っていました。行事では、雨乞いをするたびに池の底に据えた土器を重ねたそうです。実際に、平成 9 年に地元の方が池を掘ると、土師器製の鍋が重なって出土しました。

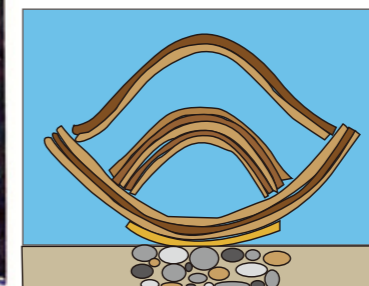
近世以降の明和町での土器生産に関わる遺跡は少なく、養村字外山にある外山遺跡で三重県埋蔵文化財センターが行った発掘調査で、粘土を備蓄する土坑が見つかる程度です。しかし、本郷地区で大切に守られている「ひささ池」の伝承は、古代からの土器づくりの伝統が絶えることなく続いてきたことを物語っています。



ひささ池と周辺の様子（北から撮影）
左手に本郷集落、右手に有貳神社跡。ひささ池の南には地元で「諸干（ぼろぼし）」と呼ばれた、焼成前の土器を乾かす場所があったそうです。



出土状況



推定出土状況図
大きな鍋状の土器を上向きに 3 個重ね、小さな鍋状の土器 5 個と大きな鍋状の土器を 2 個を伏せるように重ねていました。